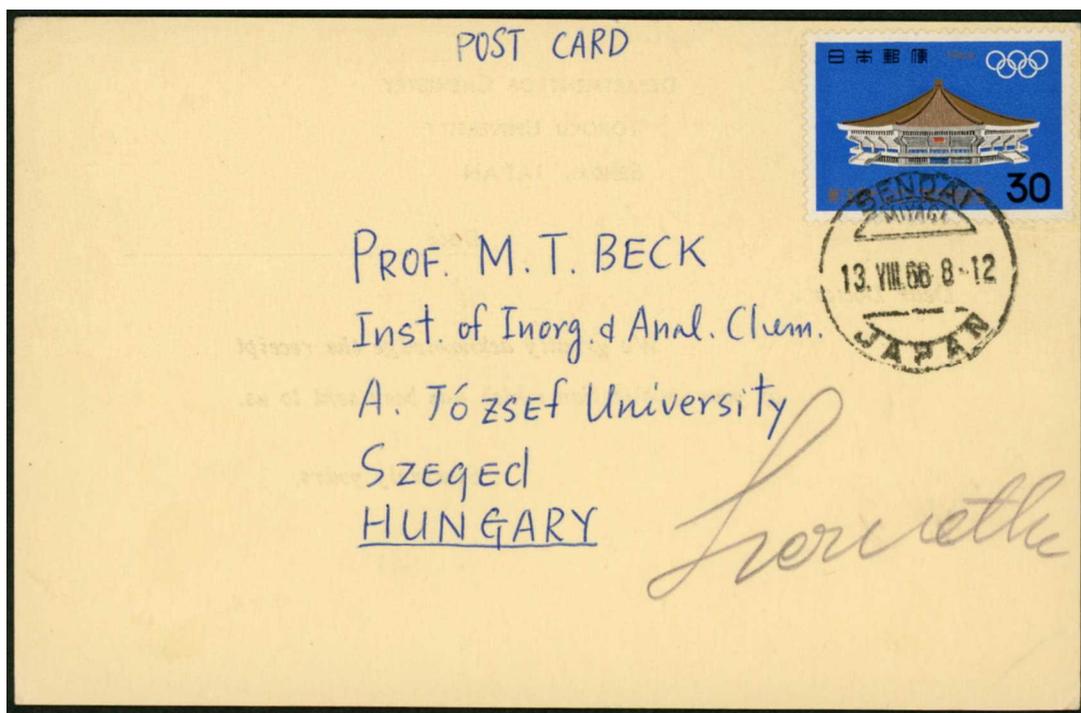


東京五輪 30 円貼り船便葉書

永吉 秀夫

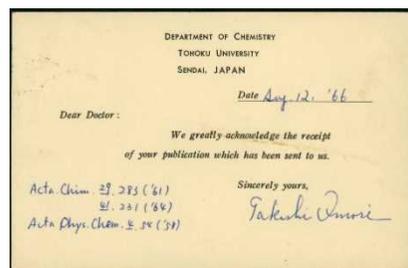
1964年に開催された前回の東京オリンピック大会では、20種の付加金つき切手に続いて5種の大会記念切手が発行されました。競技を図案化した付加金切手に対して、本番の切手は大会施設等を描くだけで、スポーツ切手としての迫力はイマイチでしたが、一度に5種(厳密に言えば5円だけ先行しましたが)もの記念切手発行というのは画期的なことであって、当時の収集家は胸躍らせて発行を心待ちにしたものです。一度に多種の切手が発行されるのは今では当たり前のことですが、「5種の額面」の記念切手同時発行というのは、ごく最近の文通週間切手を別にすると他に例がありません。昨年の東京2020でも「2種発行」(84円と500円)でしたね。

戦前の記念切手以来、高額記念切手は船便封書・葉書料金額面で発行されるのが常で、これに従うと25円・40円の発行となるはずでしたが、実際には30円・40円・50円の3種発行となりました。これらは航空3地帯の葉書料金に対応した発行と考えてよさそうです。他に航空便印刷物も同額でしたが、第1地帯あて30円の使用例はあまり目にすることがありません。



船便葉書 SEDAI 1966. 8. 13 → ハンガリー

紹介品は、発行1年半後の料金改訂で生じた新料金への使用例です。裏面(右写真)を見ればわかるように、東北大学の研究者が寄贈された論文別刷に対して送った礼状で、急ぐ用事でもないのに船便としたのでしょう。すでに航空便が当たり前の時代でしたが、東欧あての郵便ではかなり遅い時期まで、船便がよく利用されていたようです。



札幌五輪 50 円貼りの私製航空書簡

永吉 秀夫



SAPPORO 1972.2.9 → タンザニア

1972年2月に開催された札幌冬季五輪大会では、2種の付加金つき切手と3種の記念切手(十小型シート)が発行されました。8年前の東京大会と比べて、だいぶつましい発行でした。

その記念切手のうちの50円額面は海外あての船便書状料金に合わせて発行されたものですが、他に第2地帯あて印刷物航空便、全世界あて私製航空書簡にも適応していました。これらの中で最も入手しやすいのは印刷物航空便ですが、上のような航空書簡もうれしくなります。

しかも、ただの私製航空書簡ではありません。ご覧のように大会のロゴ入りです。開いてみると右のようになっています、

「SAPPORO'72 OFFICIAL TIMER SEIKO」の文字が入り、左半分には大きな絵が印刷されています。タンザニアという「ありふれてない宛先」や、裏面の押しそこなった和欧文機械印のかけらも good です。内側には、びっしりと通信文が書かれています。

